



TITLE:

山本博士逝く

AUTHOR(S):

CITATION:

山本博士逝く. 經濟論叢 1941, 52(6): 731-734

ISSUE DATE:

1941-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/131556>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五十二卷 第六號

昭和十六年六月

哀辭 故山本博士遺影及署名

論叢

支那の農家と田賦附加税……………經濟學博士 八木芳之助

佛印幣制論……………經濟學博士 松岡孝兒

企業者勞働費論……………經濟學士 大塚一朗

貨幣流通期間と平均生産期間……………經濟學士 青山秀夫

時論

重慶政府の戰時物價政策……………十龜盛次

記事

山本博士逝く

追憶文

神戸 正雄 末廣 重雄 牧野 虎次 中瀬古六郎 本庄榮治郎

谷口 吉彦 松岡 孝兒 大塚 一朗 堀江 保藏 穂積 文雄

高木 眞助 蟻川 虎三 石川 興二 金持 一郎 岡本 清造

附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第五十二卷總目錄

記事

山本博士逝く

山本美越乃先生は明治七年一月二十二日三重縣鳥羽町に生れ、鳥羽商船學校・同志社高等普通學校を経て、三十二年本學法科大學に入り三十九年六月全課程を修了し、大阪高等商業學校・山口高等商業學校に歴任し、三十八年三月より米・英・獨各國に留學すること二年半、四十五年二月京都帝國大學法科大學助教授に任ぜられ、大正五年經濟學第六講座を擔當し、七年四月法科大學教授となり、大正八年經濟學部創設の際、經濟學部勤務となつて昭和九年二月の定年まで在職せられた。同年三月京都帝國大學名譽教授の名稱を授けられた。

先生の專攻とする所は植民政策であり、その科學的體系は、先生によつて初めて打ち建てられたものであ

る。尙、水産經濟・勞働政策等についても造詣深く、その著「植民政策研究」「水産經濟」等最も世に知られてゐる。その履歷并に業績については既に本誌昭和九年一月號「山本博士還曆祝賀記念論文集」に明かであるから、茲には之を省略する。

昭和五年の外遊後病を獲られ、爾來約半歲靜養され回復されたが、その後兎角健康勝れず、定年退職の後には喘息と神經痛とで殊に冬期には籠居されることが多かつた。本年の氣候不順は先生の病體に障る所が少くなかつたと思はれるが、遂に五月十三日午後八時三十分急性肺炎のため小山下總町の自邸で急逝された。享年六十八、誠に惜しいことである。十五日午後三時蓮華谷火葬場で遺骸を荼毘に附し、翌十六日午後一時同志社基督教會堂で告別式が嚴肅に舉行された。同志社總長牧野虎次氏は式辭を述べ、本學經濟學部長・同志社校友會代表・門下生代表・京大同學會・關西移植民政策學會・同志社基督教會等の弔辭があり、弔電は人口問題研究會長侯爵佐々木行忠・帝國水産會長子爵

野村益三・樞密顧問官松浦鎮次郎・鐵道大臣小川郷太郎・前總長小西重直・永井柳太郎・山崎達之輔・徳富猪一郎・河田嗣郎・作田莊一・三井高公・關西大學・朝日新聞社等九十五通であつた。これより前長くも祭藥料を下賜あらせられた。その餘榮思ふべきである。左にわが經濟學部長及門下生代表の弔詞を録する。

弔辭

京都帝國大學名譽教授從三位勳二等法學博士山本美越乃先生俄かに病を以て逝去せらる 嗚呼悲しい哉

先生は幼にして學を好み 向學の念止み難く 笈を負ふて同志社に學び 更に明治三十六年京都帝國大學法科大學の業を卒へ 同三十八年歐米に留學 ウィスコンシン大學より マスター・オブ・アーツの學位を受け 四十年歸朝 山口高等商業學校教授に任ぜらる 明治四十五年京都帝國大學助教授に 次いで大正七年教授に任ぜられ 經濟學第六講座を擔

當し 爾來教授の職に在ること二十有餘年 植民政策及び工業經濟學の講義を擔當し 停年退職の後も猶講師として教壇に立たるること年あり その間不斷の研鑽によつて「植民政策研究」を始め幾多不朽の著書論説を發表し 我が學界に寄與せらるゝ處極めて多大なり我等は此等不朽の名著を座右に備へそこに脈々として流るゝ先生の研究的生命力を汲むことによつて 常に先生を偲び得るといふものゝ最早や今日再び先生の溫容に接するを得ず 嗚呼悲しい哉

先生はまた常にその專攻するところの學を以て學界に不朽の貢獻をなされたるのみならず 或は經濟學部長として 或は京都帝國大學總長事務取扱として 本學の運営に盡瘁せらるゝその功績定に大なりと云ふべし 更に晩年には關西移植民政策學會を興して後進の指導と植民政策學の發達とに多大の努力を拂はれたり

今や我國としては東亞新秩序の建設 東亞共榮圈

の確立に邁進すべき秋に當り 先生によつて解決せらるべき問題の極めて多かりしにも拘らず 突如として長逝せられしことは 我が邦家にとりてもまた大なる損失といふべく 洵に痛恨に堪へざる處なり 茲に京都帝國大學經濟學部を代表し哀辭を陳ね以て悼情の誠意を表す

昭和十六年五月十六日

京都帝國大學經濟學部長

八木 芳之助

弔 辭

昭和十六年五月十三日 恩師志洋山本美越乃先生
瀟焉逝去セラル

先生ガ該博透徹ノ學問ト高邁愛國ノ見識 而シテ又ソノ芳烈純真ノ人格トヲ以テ學生門下ノ育成指導ニ盡瘁セラレタルコト實ニ前後四十年ノ長キニ垂ントスソノ薰陶ヲ忝クセル子弟後進ノ數ハ實ニ幾千ナルヲ知ラズト謂フベシ 今ヤ遽ニ幽明境ヲ別ニシ

記 事

テ復タソノ溫容ヲ仰グニ由ナシ悲嘆痛惜寔ニ堪エザルナリ 先生ノ學ハ素ト極メテ深遠而モ且ツ甚ダ多方面ナリ妄リニソノ際涯ヲ劃スベキニアラズ 然ルト雖モ特ニソノ專攻ノ學域トセラレタルトコロノモノヲ敢テ舉グレバ蓋シ移植民政學 工業經濟學及ビ水產經濟學ノ三部門ナリ併セテ農業政策學モマタ力ヲ輸サレタル一ナリ

移植民政學ニツキテハ斯學開創ノ時代ニ於テ夙ニコレガ理論的體系化ノ道ヲ開拓大成セラル 兼ネテ博覽攻駁以テ各國移植民政學ノ原義ノ適否成敗ヲ實證論的ニ究明檢討シテ諸ラズトイフコト無カリシト相俟テ實ニ先生ヲシテ本邦移植民政學ノ父タラシメタル所以ニシテ我國斯學ノ歷史上ニ不滅ノ光芒ハ燦トシテ茲ニ輝クソノ學燈ハ永ク後進學徒ノ儕シク仰イデ頼ルトコロ 今日ノ所謂大東亞共榮圈ノ基礎理論ニ關スル研究ノ如キモ夙ニ先生ニヨツテ最初ノ一基石ヲ與ヘラレタリト謂ハルベキ實アリ

先生ノ工業經濟學ニ於ケル學風ハ純粹理論ノ究明

ニ事ヲ終始セラレタリト云ハンヨリハ寧ロ皇國ノ道
ニ照シテ健正妥當ナル學理ノ基礎ニ現代工業經濟上
ノ諸事相諸問題ヲ批判檢討シ以テ我國高度產業力
ノ健全ナル發達ガ就イテ倚ルベキ實踐の基準原理ヲ
提示セラレンコトニ斯學攻究ノ目標ヲオカレタルモ
ノ、如シ

特ニ嘗テ我國社會思潮ノ底流ガ滔々トシテ唯物利
己ノ方向ニ趨リ人ハ箇人ト階級トニ捉ヘラレテ動モ
スレバ皇國ノ爲メノ產業ナル國民意識ハ舉世空シク
成レルニアラザルヤノ觀ヲ呈ゼル當時ニ際シテ夙ニ
勞資兩側面ノ產業要素ニ誨エテ我國產業ノ根本義ハ
唯ダ奉國ノ一事ニ止マルノ所以ヲ悟得セシメラレン
コトニ最モ思フ勞セラレタリト謂フヲ得ベシ先生
愛國ノ丹心ハ又此ノ學域ニ於テモ生彩極メテ奕々タ
リ現下ノ國情ニ立チテコレヲ回顧スレバ先生ノ遠眼
高識ハ眞ニ驚嘆ニ餘ルモノアリコレ定ニ一箇純正眞
摯ノ學究ト熱血烈々ノ國士トガ渾然一體恰モ一人格
ニ於テ統合セラレタル姿ニシテ凡庸ノ學徒遠ク仰イ
デニハカニ達シ難キノ境地ナリト謂フベシ

水產經濟學ガ今日見ルガ如クニ國民經濟學ノ一重
要分野トシテノ性格ニ於テ發達シ來レルモノ今ソノ
沿革ヲ顧レバ實ニコレガ開拓建設ノ功ハ單リ本邦ノ
限界ニ於テニ非ズシテ實ニ世界的ノ視野ヲ通ジ最
モ大イナルモノ、一ハ正ニ先生ノ努力ニ歸セラルベ
キモノナルコト夙ニ斯ノ學界ノ定評タリ今ヤ皇國
ノ眞姿闡明ト興亞ノ大業トガ漸ク堂々ソノ緒ヲ開キ
深遠宏博ナル先生ノ學問の業績トソノ高邁赤誠ナル
人格トガ今日以後ニ於テコソ將ニ普ク學俗兩界ヲ通
シテ眞ニ正シク一世ノ識認ヲ亨ケ愈々永ク國民ノ教
師トシテ益々コレガ指導ノ大任ヲ期待セラル、ノ時
機ニ當ツテ誰カ遽カニ今此ノ悲ミニ遭フベキヲ想ハ
ンヤ

嗚呼哀哉 殊ニ濫リニソノ高風溫容ニ親近シテ慈
言熱語諄諄至ラザルナキ麓陶ノ高思ニ浴シタルモノ
悲戚痛恨最モ切ナリ寔ニ哀哉 茲ニ門下生一同ニ代
リテ聊カ卑懷ノ一端ヲ聯ネ謹ミテ先生在天ノ靈ヲ弔
ス

昭和十六年五月十六日

門下生代表 大塚 一朗